

氏 名	宗 政 五 十 緒 むね まさ い そ お
学位の種類	文 学 博 士
学位記番号	論 文 博 第 145 号
学位授与の日付	昭 和 55 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学位論文題目	日 本 近 世 文 苑 の 研 究

論文調査委員 (主 査) 教 授 佐 竹 昭 広 教 授 清 水 茂 教 授 岸 俊 男

論 文 内 容 の 要 旨

本研究の目的は、日本近世の雅文学について、主に左の二点を論述することである。その一は、雅文学の分野における若干の作品と作家について、ならびに、作品成立と作家活動の状況についての把握と解明である。その二は、右の一にいう把握と解明のための研究法の新しい枠組を提示することである。本研究では、学界において一般的に用いられている研究法の枠を使用することは勿論であるが、さらに次の三つの枠を主要な軸として立てる。第一は、作家研究において、作家の置かれている場の人間関係の態様に注目するということである。第二は、文学作品の解明において、文学伝達の通路を視野に入れることである。第三は、作品とその作家とを結合する通路として、作品の文体を理解することである。

本研究は以下の十七章から成る。

(1) 元政——その出自。近世初期の詩文家、元政の出自について、新資料を紹介しつつ解明を行う。元政の出自が、京都の地下官人の家柄であり、父の代に武門に入り、姉に至って徳川幕閣の井伊家と接触を持つことなどを明らかにし、同時に、上京の公家・知識人たちの居住する文化地域に生れ長じたという環境を重視する。

(2) 木下長嘯子「挙白集」の成立過程。「挙白集」成立の過程につき、竜谷大学蔵「長嘯家集」を資料として解明し、さらに、版本「挙白集」の歌集部や同集収載の文章の成立過程についても明瞭にし得る点のあることを述べる。

(3) 「折りたく柴の記」と新井白石。「折りたく柴の記」の文体と白石の思想について論ずる。同書の文体上の特色から、白石の自我の強烈な主張、合理的な思惟構造などを詳説する。

(4) 松室松峽——初期文人とその形成。近世中期の稗官五大家の一人、松峽の人物論である。次の(5)(6)(7)の三章とともに、新発見の松室家日記を基礎資料として用い、彼の家柄、その文事について記述し、彼が伊藤東涯の門人であること、またその経済生活と社職の関係、および彼の文人性などを論ずる。

(5) 松室松峽と池大雅。松峽の日記に見える大雅について述べる。若年期の大雅については資料が少なく不明な点が多いが、松峽日記によって絵師としての大雅の動静が判明して来る。

(6) 松峽松室熙載年譜。本年譜の作成を通して、当時の京都における白話小説家の動静を詳細に把握しようとする。

(7) 近世中期における京都の白話小説家たち。享保・元文期の京都における白話小説・華音の享受・学習について詳述。松室松峽、享保・元文期の人々、寛保・延享期の人々に及ぶ。唐話学は、少壮の知識人たちと黄檗山を中心とした僧侶に第一次の普及があり、彼らによって一般人士の間へ第二次普及が行われたと解する。

(8) 真仁法親王をめぐる芸文家たち。天明・寛政期京都の第一級の芸文家たちは、多く妙法院真仁法親王の宴集に招かれ、一種のサロンが形成されていたことを指摘し、そのサロンの社会的な意義と芸文的な意義を明らかにしようと努める。社会的な意義として、地下の芸文家の堂上者との結合、芸文家社会における身分的差別の崩壊、市民社会の予見的趨勢が見られること、芸文的意義として、近代性の指標が現前していることを述べる。彼ら芸文家は主として中間中層の出身者であり、彼らの芸文における実力によって封建社会の権力者に結合しながら、芸術的イメージにおいては新しい時代、近代を準備していたのではないかと推論する。

(9) 「近世畸人伝」の成立。本書の成立について著者伴蒿蹊・三熊花顚をめぐる小社会に含まれる人々を調査し、彼らのグループは、(8)に掲げた真仁法親王に招かれた人々と一部重なりながら、社会的には地位が下であって、庶人的な芸文家の小社会であったと把握、その成員に見られる畸人的性格を指摘する。次に「畸人伝」の文体について、「畸人伝」稿本との比較を行いながら、本書が二十年にわたる文章修練の成果として成立したものであると結論する。参考として新出「蒿蹊宛慈周書状」十六通を翻刻。

(10) 橋南谿「東西遊記」の写本と刊本。近世後期の日本巡遊記「東西遊記」の新出写本について述べ、この写本と版本との相違に留意しながら刊本の成立過程を辿り、刊本本文の性格を論ずる。

(11) 文化・文政期における京都の出版。従来湮滅したものと考えられていた「板行御赦免書目」を紹介、その内容を分析して、化政期の京都における出版の様相、漢詩文集・和歌和文集・読本・草子類とその著者の実態を究明する。

(12) 近世初期の学問と和歌。近世初期の文学に関する和漢の学と和歌について論述する。宮廷の和学、堂上の和歌・連歌についても文学史上の位置づけを試みる。

(13) 江戸時代前期における宮廷の和歌。後水尾院宮廷の和歌の環境、歌会や歌合、後水尾院による添削例の数々について検討する。

(14) 佐田昌俊——近世初期の一武家歌人の生涯。林羅山の「碑銘」を基礎として、はじめて昌俊の伝記研究を行う。

(15) 「扶桑隠逸伝」。本書の成立について検討し、本書は著者元政が彼自身の位置を歴史の中で認識するための著作であったと解釈する。

(16) 京都の文化社会——「平安人物志」化政版と京儒。「平安人物志」文化十年・文政五年・文政十三年の三つの版を素材として、京都の儒者・芸文家の全体を鳥瞰し、その特徴を指摘する。その一は、大学者・大芸文家の減少、その二は、京都儒学の衰退、その三は、儒学から詩文章へという芸文傾向、その四は、儒学考究の停滞と詩文書画制作の流行、約言すれば、漢学系芸文における学術から諸芸術へという傾

向であるとする。寛政から文化初年にかけての芸文の担い手の世代交替にも言及する。

(17) 香川景樹と猪飼敬所。香川景樹の歌学に儒学の影響がうかがわれることは知られていたが、何人について学んだかという点は従来不明であった。本章では、猪飼敬所の門人帖により、敬所に学んだことを突き止め、その師承と景樹の歌学との関係について論ずる。

論文審査の結果の要旨

本論文は、従来の近世国文学研究がややもすれば第二義的に取り扱って来た「雅文学」の領域を対象に据え、その作家と作品、ならびにそれらの環境についての本格的な研究を志したものである。この目的のために、論者は自らの博搜による数多の新資料を紹介し、活用することによって、大きな成果を挙げることが出来た。とりわけ、和文に関する諸章、京都の出版文化に関する章は、論者によってはじめて学界に示された成果である。また、文人に関する諸章は、研究方法自体に新境地を拓き、京都の白話小説家についての研究も、以後この領域の研究を大きく前進させる役目を果たした。

しかし、本論文の最も大きな価値は、従来の近世文学という概念に対して、具体的な資料と研究法をもって批判し、研究形態そのものの変革を求めたところにある。すなわち、現在の学界における基本的研究形態は、いわゆる「俗文学」を基本様式とし、「雅文学」を従属様式としている。これに対して論者は、「雅文学」を「俗文学」と並列する様式として、雅俗同格として位置づける立場に立ち、「雅文学」の文学性および社会性について力説した。

上記の諸点は、全十七章から成る本論文中の随所にさまざまな形で示されている。

(1) 元政——その出自。詩僧元政の出自を解明し、彼が伝統的な京都の士大夫層の家柄であることを明らかにした。元政の作品論としては(15)「扶桑隱逸伝」がこれに対応する好篇と成っている。

(2) 木下長嘯子「拳白集」の成立過程。近世初期の文学作品について、写本から版本が製作される過程を跡づけた労作であって、その考証と結論は概ね正当と言うべきである。

(3) 「折りたく柴の記」と新井白石。同書についての研究論文は極めて少ない。同書の文体に着目して、作品の内容と作者白石とを結合させた試みは斬新である。

(4) 松室松峽——初期文人とその形成。続く(5)(6)(7)とともに、論者によって発見された松室家文書（後に京大附属図書館寄託）を資料とする。この文書の発見・整理と内容の把握によって、これまで断片的な資料によってしか推測し得なかった近世中期の白話小説家の活動が鮮明になったことは喜ばしい。

(8) 真仁法親王をめぐる芸文家たち。論者は、近世において文学は社会的存在であり、その社会がさまざまな点で集団的であった点を重視しつつ、集団成員の個人を明確に把握しながら集団それ自体を掌握するという方法を採る。この方法は、近世文人研究に重要な枠組を提示したものとして、今後の研究にも多大の影響を与えるであろう。この研究方法をさらに発展させたものが、(9)「近世崎人伝」の成立に他ならない。

(10) 橋南谿「東西遊記」の写本と刊本。この章は、文学伝達における刊本と写本の役割を問うたもので、流布写本と版本との間にも種々の問題があることを指摘して、研究者の覚醒をうながしている。

(11) 文化・文政期における京都の出版。「板行御赦免書目」の詳細な分析によって、近世後期の出版文

化の研究は、ようやく概説の域を脱し、正確な把握を得るに至った。研究史上の意義は極めて大きい。

(12) 近世初期の学問と和歌。和学と堂上和歌とを近世前期文学史上に位置づけたのはじめての叙述として注目される。

(13) 江戸時代前期における宮廷の和歌。歌人の行実・作品・歌風についてのみ論述されて来た在来の堂上和歌研究を越えて、その環境を詳しく論じた点が卓抜である。この領域においても本篇に先行する研究は見出せない。

(14) 佐田昌俊——近世初期の一武家歌人の生涯。昌俊についての最初の本格的評伝として尊重される。

(16) 京都の文化社会——「平安人物志」化政版と京儒。文化・文政期の三種の版を比較検討して、文人社会の構成と変遷を追跡した力作である。

(17) 香川景樹と猪飼敬所。歌人景樹の儒学の師承を考証する。これも未知の新事実である。

以上、近世「雅文学」という新しい領域は、本論文によって先駆的な研究が開始されたと言って良い。個々の作品・作家についても、論者によって新しく研究領域の中に囲みこまれたものも少なくない。本論文が、現在のみならず将来においても極めて重要な位置を占め、高い価値を持ち続けるであろうことは断言して良いと思われる。

勿論、この領域は、論者にとってもようやく緒についたばかりの段階であって、各章はそれぞれ有益新鮮な成果を示しているとはいえ、まとまった文学史研究としては物足りなさを禁じ得ない。新資料の発見された作品や作家のみが重く採り上げられていること、各章の組立も繁簡宜しきを得ず、資料の新しさに比して解釈と論述が平板かつ常識的のそしりを免れないという欠点もないわけではない。今後は、細部の調査と考証を一層精密に進める一方、個々の事実の総合と文学史的体系化を念頭に置いて研究を推進させなければならない。その際、近世という時代の中で、さらに時期を細分化して文人を把握すること、「雅文学」の様式相互の諸問題、地域を言うならば、江戸・大阪その他の地方の作家と作品にまで視野を拡げて行く必要がある。また、「雅文学」と「俗文学」の間の相互関係も当然考察されるべきである。論者の今後の営為に期待したい。

結論として、本論文は、文学博士の学位論文に十分値するものと認められる。